

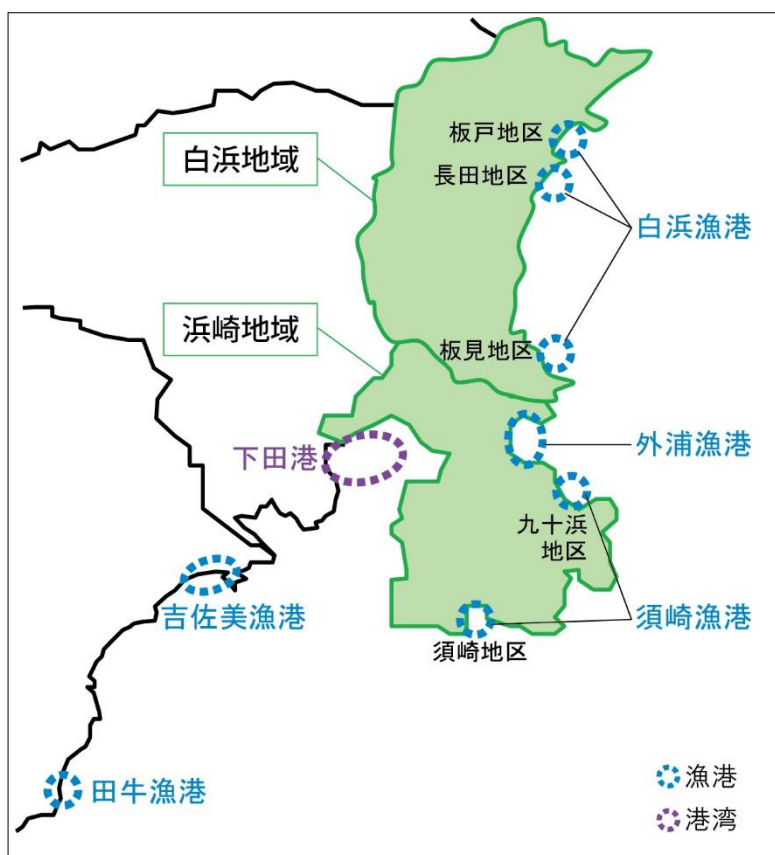
4 天草漁をはじめとする磯浜の営みにみる歴史的風致

(1) はじめに

下田市内には、港湾が1か所、漁港が5か所あり、水産業が営まれている。そのうち3つの漁港においては、昔ながらの漁法や風習が継承されている。現在、天草漁が行われているのは、浜崎地域の須崎漁港と外浦漁港、白浜地域の白浜漁港の3か所である。須崎の集落では、天草を採取してトラックで運び、天日干しする風景や、漁における安全祈願、津島神社例大祭において、海の恵みに感謝する祭礼が行われている。



天草の天日干し



漁港位置図

天草は、主に寒天の原藻として利用されている。寒天製法が発見される万治・明暦年代（1600年代半ば）以前には、^{ところてん}心太、あるいは肥料として利用されていた。白浜地域では、既に慶長3年（1598）から天草漁が行われていた記録が残されており、寛文・延宝期に作成された『^{ずしゅうしもだみなとのず}豆州下田港之図』には、浜崎地域に「ところてん役」が配置されたことが記されている。古くから、天草採集の漁法、天草を乾燥させる技法や風景は、天草の独特な香りとともに、地域で引き継がれてきている。

（2）天草漁

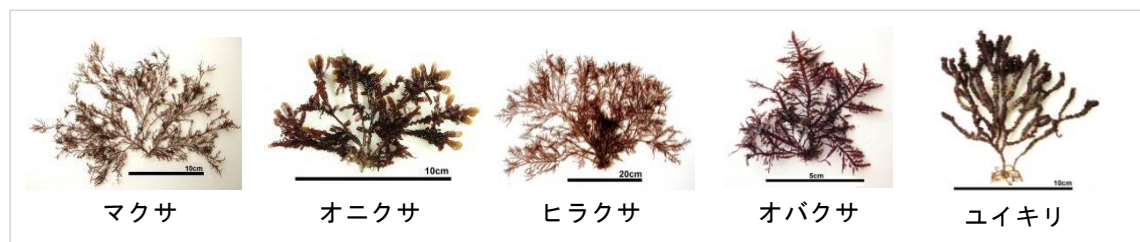
①天草漁の歴史

幕藩体制下の1770年代、須崎村を含む三村の間で漁業境界線を巡る出入りが行われていた。その出入の記録のなかに、天草は鮑サザエ同様、主たる年貢物であり、年間一定の料金をもって個人に売り渡す、いわゆる浦売りの形態が執られていたことが記されている。『伊豆の天草漁業（平成10年（1998））』によると、^{かいせん}廻船業が盛んに営まれていた須崎では、江戸表（江戸をそれ以外の地方から指するという語）への鮑の販路が確立されていたこともあって、天草よりもむしろ鮑の方が主流であったが、廃藩置県という大きな時の流れのなかで、長年鮑の販売先であった諸藩の江戸屋敷への販路を断たれたこともあり、天草漁に力を入れることとなった。

須崎区では、直接その浦を経営する採取権を収得し、^{ししゅう}志州（志摩国のことで現在の三重県志摩市）より多数の海女を雇い入れるなど、区自体の収益を高めるべく様々な工夫がなされていた。この浦売りの形態は昭和20年代まで続いた。

②天草の生態

天草類は、その多くが世界の暖海に分布する多年生の海藻で、80程の種類がある。このうち、伊豆沿岸での天草漁の対象となるものは、マクサ、オニクサ、ヒラクサ、オバクサ（ドラクサ）、ユイキリ（トリアシ）などである。



天草の種類（出典：千葉大学海洋バイオシステム研究センター銚子実験場 HP）

数種ある天草のなかで、生産量が最も多く、品質も最良であり、寒天原藻のうちで最も重要であるのがマクサである。マクサの繁殖には、胞子によるものと栄養繁殖（ちぎれた藻体が基盤に付着し、生長する性質）によるものがある。胞子が着生して海中で3週間位経過すると体長0.2～0.3mmになり石の上でも肉眼でかろうじて認められるくらいに生長する。天草類の体の大きさは、同じ種でも生育場所によって変化するものであり、かつて白浜で、8月にマクサの群落内にコンクリートブロックを投入し、着生したマクサの成長を調べたところ、8か月後では平均草長4.1cm、最大6.0cm。10か月後は平均草長6.6cm、最大10.7cm。1年後で9.1cmとなった。1年以上の生長については、16か月後平均草長12.0～14.0cm、24か月後15.0～17.0cm、36か月後18.0～20.0cmだったと報告されている。

③漁法

伊豆半島沿岸では水深5mから20m付近までが主漁場となっているが、生育適層であるとともに、潜水作業などの採取効率も関係していると思われる。

天草の漁法は、大きく4種類に分けられる。一つ目は、浅いところに着生した天草を磯で直接採取する方法である。この方法には、磯で潜らず採取する方法と、船を使用し、海女が潜って採取する方法がある。二つ目はマンガ（農具の馬^ま鋤に似た道具で、海底を曳いて竹製の櫛の歯に天草を挟み採る）を用いて採取する方法、三つ目は基盤から離れて漂流する天草を採取する方法である。



須崎の天草採取風景
(昭和20年(1945))

④浜処理

天草を採取してからの天日乾燥、梱包などを浜処理と呼び、その方法は、昔からほとんど変わらず、現在まで継承されている。この浜処理の風景を、天草漁を行う地域でみることができる。

潜水などによって採取された天草は、陸に揚げた後から雑草などを取り除き、淡水に恵まれている地域では河川水を利用して塩抜きを行い、そうでないところではそのま



昭和40年(1965)頃の天日干し

ま乾燥し、選別、梱包ののち製品として出荷している。天草の乾燥は、天草生産地での浜処理の中で最も大切なものの一つである。

⑤天草の利用

乾燥、選別を終えた天草は、栄養価に優れた食材で、コレステロールの低下、大腸がんの抑制、免疫力の上昇、血糖値低下作用があり、市内でも心太等に加工されている。寒天については、心太や羊羹の原料として使用されることは広く知られているが、寒天は、他にも工業用への利用、バイオテクノロジーへの利用、医薬用としての利用、化粧品などに利用されている。

(3) 天草漁をはじめとする磯浜の営みに関する建造物

①須崎の集落

須崎の集落は、岩礁に囲まれた小さな入江に面し、海に面する斜面地に民家が階段状に密集している。集落内の街路は細く、斜面が急なことから集落内の道路には階段も見られる。釣船を経営している家もあり、船の名前を掲げている建物も多い。天草漁の拠点となる港では、昭和27年（1952）建設の石張堤の護岸があり、港と集落一帯で磯浜の趣ある漁村風景を形成している。



須崎の集落



須崎漁港

②津島神社

津島神社は、海を見下ろすことができる集落の高台にあり、祭神は須佐之男^{すさのおのみこと}命である。拝殿は、妻入り、入母屋造、銅板葺きである。鳥居の前には石灯籠が2基配置され、昭和10年（1935）建立と記されている。



津島神社



津島神社の石灯籠

(4) 活動

①天草漁

須崎では、潜って天草を採取している。天草は多年草の草であるため周年みられるが、現在の採取時期は通常4月下旬から9月頃までとなっている。従事者は、漁に出る前に港にある海神社へ行き、漁の安全を祈願して漁に出ていく。暖かい時期は午前中漁に出て、午後梱包等の作業を行うが、秋口になると、乾燥、梱包作業が主となる。天候が良い日は、3時間ずつ裏表干され、倉庫に保管される。

天日乾燥したあと、根を取り除き、機械で束にする。この束のことを「ボン」と呼ぶ。束にする際は、等級別に、上草（マグサ）、鬼草（アカ）、鳥足草（アオ）、ドラ草の4種に選別される。



須崎の天草天日干し範囲



海神社での祈願（口開き）



天草乾燥後収集する



天草の運搬



天草の根っこ取り



天草のポン（束）作り

商業的に利用される天草は、須崎の天草倉庫の前の広場で天日乾燥を行うが、集落内で漁業権を持つ人は、個人で天草を採取し、自宅の庭先で天日乾燥を行う。なお、現在は機械詰めだが、2年ほど前までは、大きな樽の中に入れた天草を女性が向かい合って力いっぱい踏み固めて束を作っていた。その光景が、まるでダンスをしているように見えることから「樽ダンス」と呼ばれた。

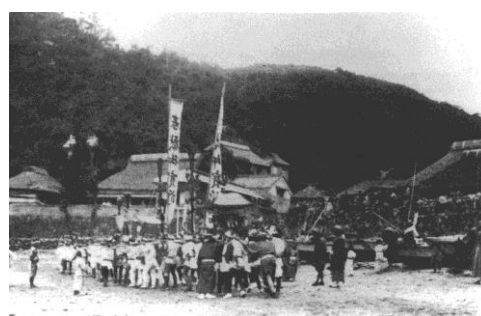


集落での天草天日干し

「樽ダンス」
(平成 25 年 (2013))

②津島神社例大祭

津島神社例大祭の始まりには2つの言い伝えがあり、1つ目は明和6年（1769）に下田・柿崎・須崎^{かきさき}で浜の境界争い（磯争い）があり、須崎が勝訴し、漁域拡大により村民の生活が向上したこと、2つ目は、磯争いの際に日本全国で疫病が蔓延したが、須崎では津島神社にお参りしたため亡くなる人がいなかったことといわれている。



津島神社例大祭（明治10年（1877））

この2つの事柄に対する神様への感謝と崇敬の念から、安永5年（1775）、津島神社例大祭は始まったといわれ、毎年旧暦の6月15日に行われている。

『写真で見る須崎の今昔（平成25年（2013））』に明治10年（1877）に行っ

た例大祭の様子が掲載されている。

祭典奉仕者は、早朝に海に入り禊をし、日ごろの海の恵みに感謝し、須崎の平和を祈り、神輿を巡行する。祭りの終盤には、海入りがあり、神輿が何度もぶつかり合い、練り歩く際には、住民も拍手や掛け声を出し、海入りをする。その後は、最後の力を振り絞り、長い坂を上って宮入をする。

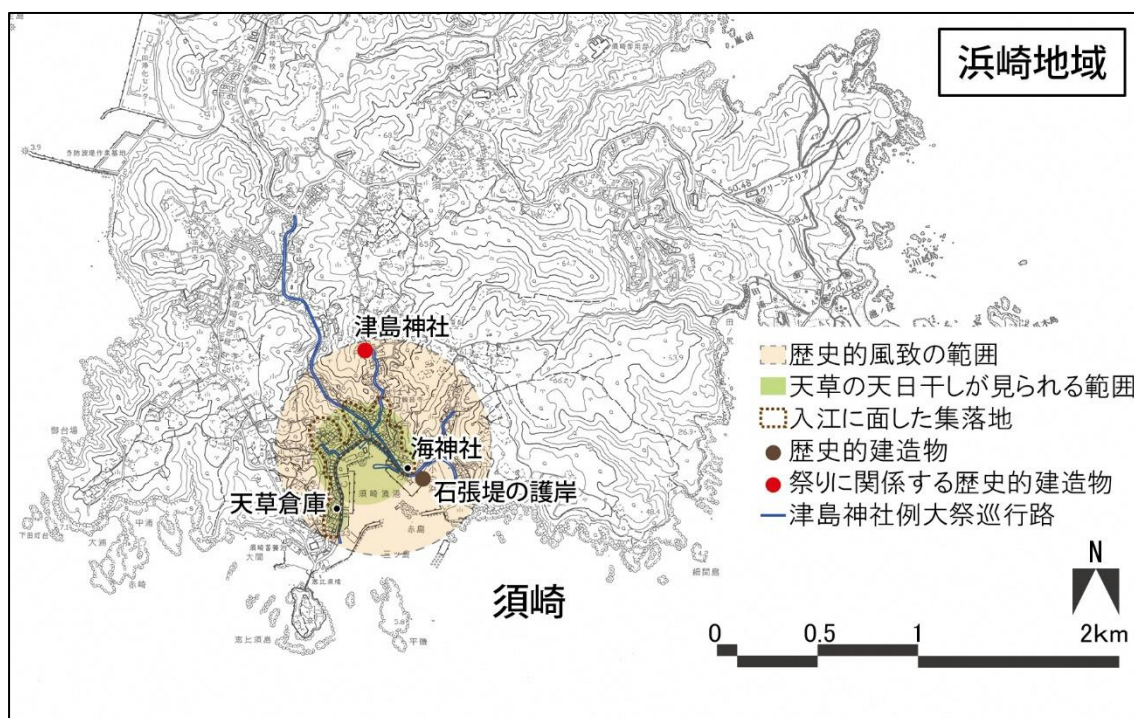


津島神社例大祭

(5) まとめ

天草漁は代々受け継がれてきた産業であり、天草生産のための経験と知恵は、現在でも浜で継承され、その産業とともに大切にされてきた神社や天日干しの風景が残されている。

須崎では、海の恵みに感謝して津島神社例大祭が行われ、漁で採れた天草の天日干しの風景は、本地区ならではの美しい風景であり、維持向上すべき歴史的風致である。



天草漁をはじめとする磯浜の営みにみる歴史的風致の範囲

＜コラム5 天草漁にまつわる活動＞

■白濱神社の天草感謝祭

白濱神社で行われる白浜神社例大祭の天草感謝祭には、白浜地域の天草漁従事者や地域住民が出席する。天草感謝祭は、例大祭の初日の午前中に行われ、天草1本を奉納しつつ、今期の漁が無事終了したことを感謝して祭りに参列する。地元の学識者によると、昔は30kgの天草の束を4段10本並べ、祈祷を行っていた。祈祷後はその束を売り、白濱神社例大祭の費用に充てていたという。昭和12年（1937）には既に行っていたという。なお、漁期前には、浦はじめ祭といい、白濱神社で漁の安全と豊漁を願って祈祷を行う。

■龍宮神社の水産祭り

外浦では、9月から10月の十五夜の時期に、龍宮神社で水産祭りが行われる。須崎両神社の神主が御祓いを行い、漁の祈願を行っている。天草漁が外浦の主たる産業であった大正時代に始まったと言われている。



白濱神社 拝殿



龍宮神社